

事前の想定（消波等により新たなアサザの生育環境を創造できる。あるいは既存するアサザ群落を保全できる。）

モニタリング内容

- アサザ現況調査
(既存のアサザ群落を対象)
- アサザ実生調査

結果概要

- 全地区全体で見ると、アサザ群落は増加してきたがH17年と比べてやや減少に転じ、そのうち保全対象区では根田地区（粗朶工区）を除き概ね保全されている。（図1,2,3,4）
- アサザの復元・再生対象区では石川地区を除く6地区（9工区）のうち、一部達成した（効果あり）と評価できたのは、鳩崎、永山、境島（養浜工）、根田（島堤工）及び大船津（養浜工区）の5地区（6工区）で、古渡と境島の捨砂工区では達成できなかった。同様の対策（移植+消波+杭柵）を行った境島地区、大船津地区において群落の発達程度が異なっている（境島で拡大しない）（図5,図6）。
- アサザの発芽個体数には年変動があり、そのうち定着（浮葉化）するものはわずかである（図7）。
- 既存群落の保全地区のうち、繁殖に必要な短花柱花、長花柱花の両方が確認されたのは麻生、梶山のみであった（図8）。

知見

- 消波等による対策は既存するアサザ群落の保全に有効であるが、新たな生育環境の創造に対しては効果にばらつきがある。
- 種子生産能力のある群落は少なく新たな種子の供給源は限定されており、種子からの発芽は主にシードバンクによると考えられる。

評価

- 既存するアサザ群落は消波等により保全できると評価できるが、新たな生育環境の整備には一定の効果にとどまる。効果にばらつきがあることについては不明である。
- シードバンク含有土壌からアサザの発芽がみられ、わずかでも定着、浮葉化したことは評価できる。

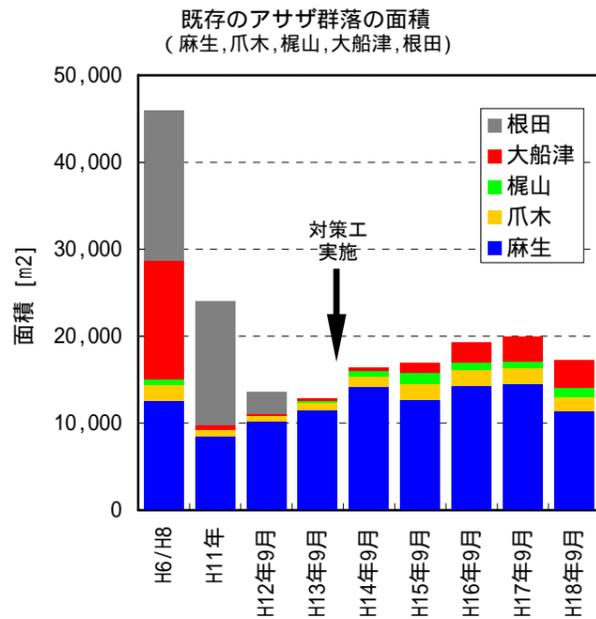


図1. 既存のアサザ群落面積の変化

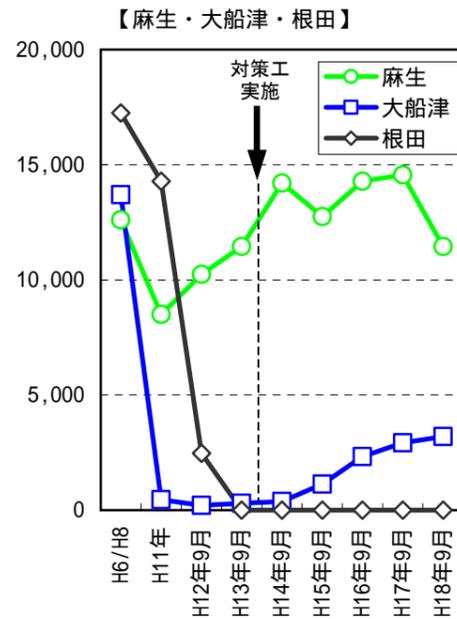


図3. 大規模アサザ群落の面積変化(単位:m²)

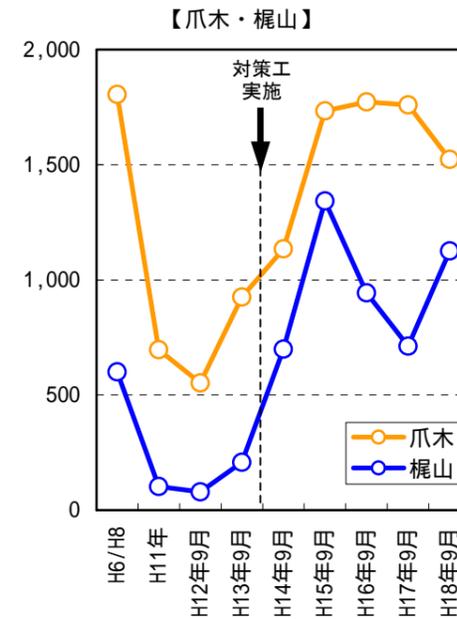


図4. 中小規模アサザ群落の面積変化(単位:m²)

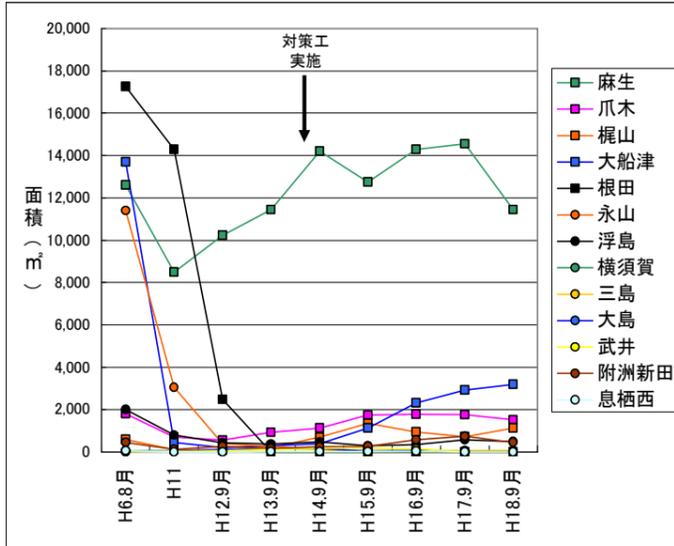


図2. 各地区のアサザ群落面積の変化

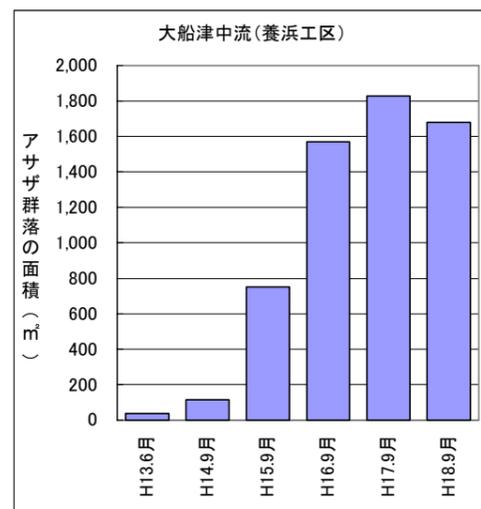


図5. アサザ群落面積の変化(大船津地区)

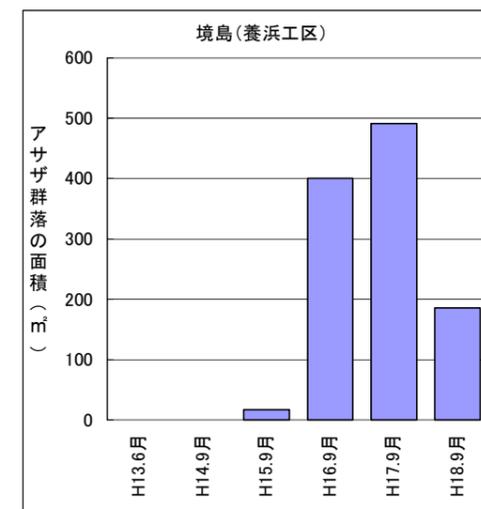


図6. アサザ群落面積の変化(境島地区)

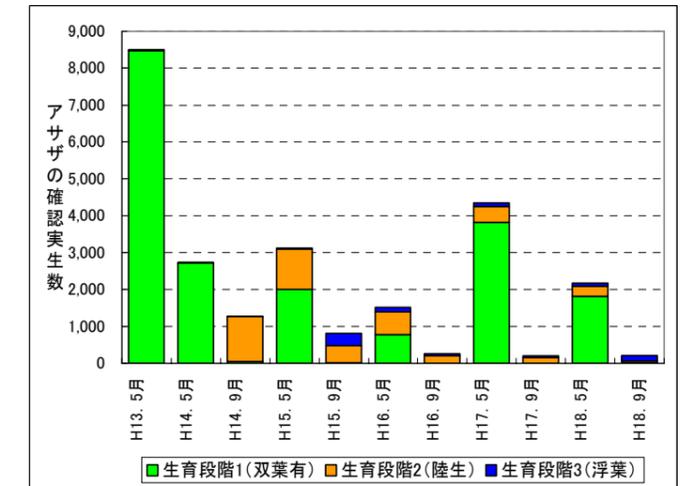


図7. アサザ実生数の変化(全地区合計)

- アサザ実生の生育段階区分
(生育段階1): 双葉が確認でき芽生えて間もないと考えられる個体。
(生育段階2): 双葉が確認できず、芽生えてからある程度の期間が経ち、定着したと考えられる個体。ただし、浮葉化はみられない。切藻から定着した個体である可能性もある。
(生育段階3): ある程度の期間の生育段階2を経た後、浮葉化したと考えられる個体。

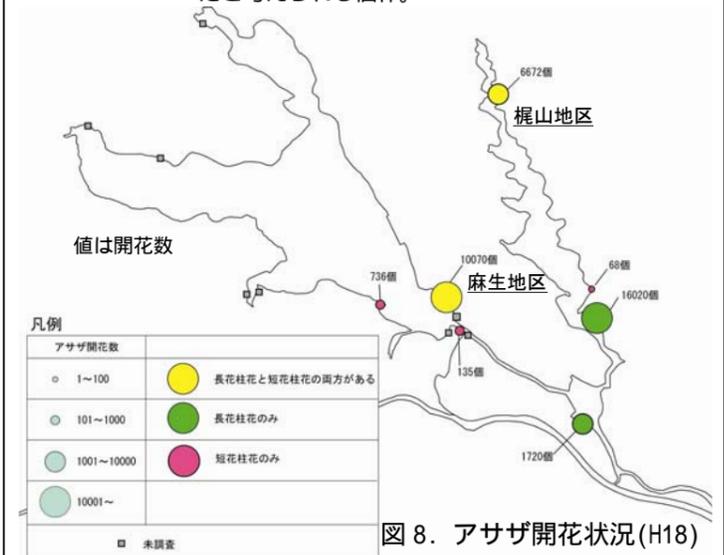


図8. アサザ開花状況(H18)